題目　　近代日本における子ども向け雑誌と読書文化

学位申請者　　小野（柿本）真代

日本の子ども向け雑誌は、明治期以降様々に展開し、戦前期には 60 種以上もの雑誌が存在した。こうした子どもの雑誌文化は、日本においていかに形作られ、またそれらはどのように子どもという読者を作り上げてきたのだろうか。本稿は、近代日本における子ども向け雑誌が成立する過程と子どもの読書文化を歴史的な視座から問い直そうとするものである。

近代日本における子ども向け雑誌については、「児童文学生成の土壌」として主に児童文学研究の領域で論じられてきた。また、1980 年代以降は、社会学やメディア史などの研究領域でも「少年」や「少女」といったカテゴリの生成や当時の立身出世観を知るための好適資料として子ども向け雑誌が扱われるようになった。

日本の子ども向け雑誌の歴史は、『頴才新誌』（1877 創刊）のような子どもの作文を掲載することを主眼としたものから、『少年園』の登場（1888 創刊）によって大人が子どものために編んだ読み物を主体とし、豊富な挿絵、クイズに投書など、様々な記事を併せ持った今日われわれが想像する子ども向け雑誌の原型ができあがったとされ、それ故『少年園』に関する研究も多い。本稿においても『少年園』の歴史的意義については認めるところである。しかし、『少年園』以前に子どもを読者対象とした雑誌がなかったかといえば、そうではない。例えば、大阪で創刊された『ちゑのあけぼの』（1886 創刊）は、作文の投稿を主とせず、大人が「子ども」のために編集した読み物を中心とした雑誌であった。ところが、『頴才新誌』という例外を除けば、『少年園』以前、草創期の子ども向け雑誌は十分に検討されてきたとは言い難い。

近代日本の児童文学史における「草創期」にあたる明治維新から約 20 年間が、研究史上の空白となっていた要因のひとつは、児童文学研究における「児童文学的な創造力」や芸術性の重視と、「翻訳」や「啓蒙」への関心の希薄さにあった。近年は草創期における翻訳書や啓蒙書の研究がすすみ、グリム童話やアンデルセンなどの外国児童文学の受容にアメリカの英語教科書が重要な役割を担ったことや、それらの啓蒙書が何をどのように訳したかなどについても明らかになってきている。

本稿では、比較文学の分析手法を用いて草創期の子ども向け雑誌について検討していく。先行研究においては『少年園』などの雑誌の誕生の要因を「教育界からの要請」としてき

たが、日本の場合は近代的な教育制度もまたこうした西洋からの輸入、すなわち「翻訳」を経て成立したものであることを考えると、草創期の子ども向け雑誌の成立についても、「教育界からの要請」という内的な要因のみならず、諸外国との人的交流や書籍・雑誌の輸入による影響は見過ごすことができない。

また近年の読書研究では、書物そのものの内容だけでなく、書物が読者へとどけられるまでの「あいだ」を考察することの重要性が指摘されていることをふまえ、草創期の子ども向け雑誌の成立過程と子どもの読書文化について、「つくられる」過程、「届けられる」過程、「理解される」過程の 3 つの観点から論じる。具体的には、子ども向け雑誌が成立するにあたって、だれがどのような外国文献をどのような経路によって入手したのか、そしてどのような情報を選択し、どのように書き換えられたのかについて、複数の雑誌の比較・対照によって明らかにする。こうした観点から雑誌をとらえなおすとき、「翻訳」は創造性に欠く二次的な行為ではなく、国境を越えて書物をもたらし新たな読者と読書文化を形成する創造的な営みとして捉えられる。分析の対象については、1876 年創刊のキリスト教機関誌『よろこばしきおとづれ』からその後の子ども向け雑誌の典型となった 1888 年創刊の『少年園』までを中心に行った。

第 1 章「子ども向け雑誌の淵源―キリスト教伝道と『よろこばしきおとづれ』」では、まず幕末期に来日した宣教師らの伝道と出版活動について、子どもを対象としたトラクト類を中心に確認した。日米修好通商条約の翌年から宣教師の来日は相次いだが、キリシタン禁制の高札が撤去されるまでは目立った伝道は難しかったため、宣教師らは日本語を学びつつ、中国伝道で用いられた漢訳聖書やトラクトを活用した 1873 年に高札が撤去され本格的に伝道が開始されることになり、日本語の伝道用トラクトも出版されはじめた。その中のひとつである『真の道を知るの近路』は、子どもや漢字が読めない人々も対象としたものであった。

次に、1876（明治 9）年に創刊された『よろこばしきおとづれ』に着目し、この雑誌がどのように資金や素材を得て編集されていたかについて分析した。編集に際しては『小孩月報』という上海で発行されていたキリスト教雑誌を参照したことが伝えられてきたが、『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』を比較すると、内容や構図が共通する記事が多数含まれており、ともに外国日曜学校協会という組織から資金提供を受けていたことが明らかになった。アメリカでは大規模な第二次信仰復興のもと日曜学校運動が展開され、西部の開拓地で日曜学校を設立するとともに、日曜学校で教材として用いるためのカードや

子ども向けの読み物が多数出版されることになった。こうした運動はやがて国境を越え、ブルックリンで外国日曜学校協会が設立されることとなった。外国日曜学校協会では資金だけでなく、アメリカで出版された日曜学校用の読み物や雑誌の提供も行っていた。

中国で発行された『小孩月報』の場合は、すでに中国で発行されたトラクトやキリスト教新聞・雑誌があったため、外国日曜学校協会から送られたアメリカの新聞・雑誌だけでなく、中国で発行されたキリスト教新聞・雑誌を参照しながら編集していた。一方、日本の場合は伝道が本格的に開始されてから日が浅く、週刊のキリスト教新聞『七一雑報』しか先行するキリスト教新聞がなかった。そのため、『よろこばしきおとづれ』の記事は、『小孩月報』や米国聖教書類会社から発行された雑誌や子ども向けの読み物からの記事の転載が多く、編集にあたっては原文よりも聖句や信仰の重要性をさらに強調する記事になるよう書き直しが行われていた。

こうした加筆がなされたのは、『よろこばしきおとづれ』は子どものための雑誌であるだけでなく、日曜学校の教材として、また人々を信仰に導くためのトラクトとしての役割も期待されていたためだと考えられる。『よろこばしきおとづれ』は、宣教師らの開拓伝道の際に持参され無料で配布されたほか、教会やミッション・スクールでも購読され、書店での販売というよりは、直接の配布や定期購読によって読者へ届けられる雑誌であった。

第 2 章第 3 章では、1886 年に大阪で創刊された『ちゑのあけぼの』を対象とした。第 2 章「キリスト教機関誌から子ども向け雑誌へ―編集者たちの足跡をたどって」では、まず雑誌の発行所や誌面、編集者の変遷を踏まえた上で、編集者たちの経歴を教会史料や学籍簿を用いて明らかにするとともに、彼らが関西に拠点をおいたプロテスタント宣教団体アメリカン・ボードの宣教師らと密接に関係をもつ人物たちであったことを示した。また、挿絵に添えられた落款などを分析し、関係した絵師は錦絵新聞などで活躍した大阪歌川派に属する絵師であったことを指摘した。

次に、第 3 章「子ども向け雑誌の誕生―キリスト教と『ちゑのあけぼの』」では『ちゑのあけぼの』の編集と流通について分析を行った。第 2 章でみてきたように、編集者らはみな関西の教会に所属するキリスト者であった。ところが創刊にあたってこの雑誌は小学校教育を補完するためのものとして位置付けられており、一見するとキリスト教との関係はなさそうにみえる。しかし、第 1 章で分析した『よろこばしきおとづれ』やその後継誌『喜の音』、日本で最初のキリスト教週刊新聞『七一雑報』などから、多くの記事を引用していた。また、雑誌の売捌所にはアメリカン・ボードが出資したキリスト教書店や伝道地のキ

リスト者が営む書店なども多く含まれており、『ちゑのあけぼの』はキリスト教主義を前面に押し出した雑誌ではなかったものの、伝道による人的ネットワークは雑誌の販路の基盤となった。

一方で、誌面の編集にあたっては『七一雑報』や『喜の音』の記事を引用しつつも、聖書の一節を削除したり、ことわざなどに置き換えたりすることによって、『ちゑのあけぼの』では記事の内容を一般的な教訓譚へ作り替えていた。ただし、『ちゑのあけぼの』はキリスト教を否定しようとするものではなく、聖句をなるべく用いずにキリスト教の教えや西洋文化を伝えようとしたものだと考えられる。日曜学校に通うような、もともとキリスト教に関心のある子どもたちだけでなく、学齢期の多くの子どもに聖書の教えや西洋文化を伝えるために、このような編集がなされていたと推測される。『よろこばしきおとづれ』は様々な宣教師や日本人伝道師が新たに開拓された伝道地で配布することで、人々を惹きつける手段として活用されていた。一方、『ちゑのあけぼの』はすでに伝道が行われ、教会が設置された地を売捌所として設定し、キリスト教を前面に押し出さないようにすることで、新たな読者の獲得を目指したものであった。

３章までで、宣教師らがもたらしたアメリカの子ども向け読み物が、『よろこばしきおとづれ』や『ちゑのあけぼの』の創刊に影響を与えたことをみてきたが、第 4 章「日本における洋書輸入―宣教師の丸善利用」では宣教師らがどのように本国の書籍や雑誌類を入手していたかについても、若干の考察を行った。個別に本国へ依頼を出す場合はもちろん多かったようだが、アメリカン・ボードでは日本の洋書取次店である丸善へ依頼し、洋書や洋品、洋紙、また英和辞書の取り寄せを行っていたことを、丸善が宣教師宛てにしたためた英文・和文書簡の翻刻を通して明らかにした。本国の書籍や雑誌を宣教師らが入手しようとする際のルートは、本国との単線的なやりとりのみではなく、場合によっては日本の洋書取次店を介したルートも存在したことが明らかになった。

第 5 章「子ども向け雑誌の展開―『少年園』と西洋文化」で検討した。『少年園』は 1888 年に創刊されたが、『少年園』の愛読者であった詩人の河井醉茗は、「何処となく雑誌全体に西洋味の交つてゐたのも目新しく感じられた」と後年回想している。この「西洋味」は何に起因するのか。従来『少年園』はイギリスの児童雑誌『リトル・フォークス』に倣ったという指摘がなされてきたが、本章ではアメリカの子ども向け雑誌である『セント・ニコラス』との関係について考察した。『セント・ニコラス』は 1873 年にアメリカで創刊された雑誌であり、宗教色や説教臭さを排し、サンタクロースのように毎月子どもたちに楽

しみを届けることを目的とした子ども向け雑誌であった。本章で『セント・ニコラス』に注目したのは、『セント・ニコラス』に『少年園』主幹であった山縣悌三郎の長男、文夫からの投稿文が掲載されており、文夫は『セント・ニコラス』の編集部へ『少年園』を送っていたためである。本章ではまず、当時の日本で『セント・ニコラス』が当時の日本でどの程度購読されていたのかについて考察した。ミッション・スクールでの購読や、日本在住のアメリカの子どもたちによる定期購読の事例がみられたほか、外国書籍取次業者を介した雑誌の購入の可能性が示された。『少年園』主幹の山縣悌三郎は師範学校在籍時から、東京書籍館などで洋雑誌を閲覧し、その中の記事を訳して雑誌に投稿することを繰り返していた。文部省御用掛に任命されてからも洋書や洋雑誌から知識を吸収し、それを翻訳するという活動が、彼の文筆活動において重要な作業であった。前章まででみてきたのは、キリスト教ネットワークを介した洋書の受容であったが、山縣の場合は文部省による洋書の収集が、自らの思想形成や教科書・雑誌編集に重要な役割を担ったといえる。

『少年園』では偉人伝や科学記事、挿絵など様々な記事を『セント・ニコラス』から転載・翻訳していた。ところが、冒険譚を描く際にも冒険の楽しさよりも恐怖を強調し、危険性を排除しようとしたという『セント・ニコラス』とは、同じ話でも描かれ方はまったく異なるものであった。例えば、水雷について、『セント・ニコラス』の記事ではあくまで防衛のための武器であり、他国とのトラブルは話し合いで解決すべきと主張するのに対し、『少年園』では水雷の爆発する様子は実に壮観とされ、子どもたちは「国家感情」を養うため軍事演習を見に行くことが推奨された。２章で検討した『ちゑのあけぼの』もまた、アメリカの子ども向け雑誌の記事を翻訳・掲載することがあった。しかし、『ちゑのあけぼの』では日本と西洋が対比されながら見習うべき手本として極めて好意的に「西洋」を参照したのとは対照的に、『少年園』では西洋の知識や文化の紹介をしながらも、西洋に対する羨望というよりも、ときに敵対意識をもちつつ、大幅に加筆修正がなされていた。すなわち、『少年園』は『セント・ニコラス』からコンセプトや編集方針を学ぶために参照したというよりも、西洋の雑誌に掲載されている伝記や科学記事に着目し、将来日本の礎となる子どもたちに西洋文化や新たな知識を提供するとともに、子どもたちに世界へ目を向けさせ、「国民」としての意識を引き出すことにもつながっていたのであった。

第６章「子どもと読書―二宮金次郎の読書図を手掛かりに」では、薪を背負い歩きながら読書する偉人として描かれた二宮金次郎の読書図を題材として、江戸末期からの読書観の変遷をたどった。江戸期の寺子屋で用いられた教科書類でもやはり、働きながら読書す

る人物図は描かれており、読書について一定の価値は認められながらも、中心となるのは家業とされあくまで読書は家業の暇に行うものとされた。家業はすなわち孝行の手段であるため、最重要の徳目として考えられていた。しかし、明治期に入ってからの読書図では、子守や薪拾いをしながらも同時に怠らず読書することが推奨された。それは個人の立身出世の手段として、同時に富国につながるものとして「読書」が重視されたからであった。

第 7 章「子どもと雑誌の読書実態―『少年園』の書き入れをめぐって」では改めて『少年園』の読者とその実態について、雑誌本体に遺された書き入れを対象に分析した。当時の読書法として、書物を大切にしつつも重要なところに線を引き、書き入れをしておくことは書物を深く理解するための手法として認められていた。『少年園』の書き入れは巻頭論説をはじめとした立身出世譚に比較的多くみられ、記事に同調し、自分を鼓舞するような書き入れが多くみられるほか、自分以外の他者、とくに年少者に向けて『少年園』の読書をすすめる書き入れもみられた。また記事によっては子どもに不適切と批判する書き入れも存在した。書き入れによって、自分が深く理解するためだけではなく、読むべき記事を際立たせ、読むべきでない記事を排除する効果もまた生み出されていた。

第 8 章「日記にみる読書と子どものリテラシー形成―高等小学校生徒の『日誌』から」では、明治期の子ども読者にとって、雑誌を読むことは生活のなかでどのような位置づけにあったのか、また彼らが読むことと書くことをどのようにむすびつけていたのかについて、10 歳の少年が記した『日誌』をもとに分析した。定型文の作文から自分の経験を書かせる作文へと徐々に変化していく中で、日記が自己修養の手段として、また教材として定着していく過程を明らかにした上で、日記には例文が用意されるだけでなく教員によって点検を受ける対象ともなり、自由な記述が許される場ではなく子どもとしてあるべき自分を書く場としても機能したことを指摘した。また日記の例文としてしばしば読んだ雑誌について書くことが例文として挙げられるが、本稿で扱った『日誌』でも『風俗画報』や『少年世界』といった雑誌を読んだ記録が残されており、さらにその読み方について教員からの指導がなされていた。こうした例からは、家庭での読書にも学校の管理が及んでいたこと、雑誌を読むことは日常的な営みであると同時に、書くことの動機付けにもなっていたことがうかがえた。